

# 人間とは何か、どこへ行くのか

国内外の研究者でつくる学際NPO「GN(グローバルネットワーク)21」(本部・京都市)主催のシンポジウムがこのほど、京都市中京区の立命館大朱雀キャンパスで開かれた。宗教学者の山折哲雄さんが、「予想できない」ということ「現在と未来」と題して講演し、研究者が学問の原点に帰り、巨大災害のような「想定外」の事案に対応していく重要性を説いた。

## 学際NPOがシンポジウム 山折哲雄さん講演



災害と学問のかかわりについて語る山折さん(中央)  
＝京都市中京区・立命館大朱雀キャンパス

基調講演し、「長人類研究やロボット工学、生命科学の発達で、人がヒトとしてモノに近づき、哲学を含む伝統的な社会諸科学のエネルギーが滅殺されてきた」と、先端科学偏重の現代社会に疑問を投げかけた。

そのうえで「災害を慈悲の道徳や知恵で乗り越えてきた日本人には本来、『天然の無常』という宗教概念が染みこんでいる」と指摘。オウム真理教事件、リーマン・ショックなど宗教学や経済学にも「想定外」の衝撃を与えた事例を挙げ、「多くの学問領域が先を予測できなくなっている。人間とは何か、どこへ行くのか、形而上学の問題が今こそ重要であり、3・11の災害は、そうした出発点に学問が立ち戻ることを要請しているのでは」と出席者に語りかけた。

また、文学や社会学の研究者らが報告を行い、議論を深めた。

GN21は、評論家の故加藤周一さんを代表として元立命館大教授の片岡幸彦さんらが編集していた季刊誌のグループをもとに、1997年に発足した。山折さんは、GN21の顧問を務める山折さん

(佐久間卓也)